「言語能力」の育成を目指す指導法の研究

～「個別最適な学び」と「協働的な学び」を基盤にした授業づくり～

今日的課題を踏まえ、授業改善に資する教材研究の１考察

全国小学校国語教育研究所　研究協力委員　向　田　　宏　男

Ⅰ　初めに

令和３年度「中教審答申」を踏まえ、研究主題が変更されました。説明的文章を取り上げ「個別最適な学び」と「協働的な学び」を基盤にした授業づくりの具現化を図ると明記されたのです。～「個別最適な学び」については、「指導の個別化」と「学習の個性化」に分けられる。「指導の個別化」は、子ども一人一人の特性・進度・到達度に応じ、指導方法・学習時間等の柔軟な提供・設定を行う。「学習の個性化」は、教師が一人一人に応じた学習活動・課題・取り組む機会の提供で子ども自身の学習が最適となる、と整理した。個性をもつ学習者は、他の個性と出会う「協働的な学び」の中で鍛えられる社会性をもった個性として輝きを増すといえる。そこで大切になるのが学習者による「問い」である～と高木まさき氏は分析しています。(出典　光村図書６年　国語学習指導書　高木まさき氏　横浜国立大学)

２０２３年１１月、ユネスコ加盟国１９４か国は、全会一致で「平和人権及び持続可能な開発のための教育勧告」(略称) を可決しました。世界共通の諸問題を解決するために「平和」や「持続可能な開発」などについて全ての人々が積極的に学ぶべきと指摘しています。国語科教育においても、DEI や SDGs 等の学びを通し、単元や教材に生かすために必要な創意工夫など教材研究への取り組みが望まれます。昨年、第５３回全国国語教育研究会広島大会で提案された研究の中で、DEI や SDGs 等の学びが取り上げられました。全国小学校国語教育研究会会長佐伯孝司氏は、挨拶文の中で、「・・伝え合う力を高めるとは、人間と人間との関係の中で、互いの立場や考えを尊重し、言語を通して正確に理解したり適切に表現したりする力を高めることである。このような力を高めるには、**多様な人々と協働する態度**、あらゆる他者を価値ある存在として認め、**自他を尊重する態度**を育むことが、特に重要であると考えます。その上で　言語活動を通じて、未知の状況にも対応できる思考力・判断力・表現力などの育成を目指すことが大切になります・・以下略」と述べています。太字の文言が今日的課題のDEIやSDGs等に繋がるものととらえることができます。

Ⅱ　広島市立白島小学校の取り組みから学んだこと

～児童が関わり合いを通して、多様性を尊重し主体的・対話的に学ぶ授業づくりを～

「関わり合い」を実現するためのグランドルールの設定

主題設定理由から：本校には外国にルーツをもつ児童が多数在籍。多様な文化背景を有する学校。国籍や文化の違いだけではなく、特別な支援を必要とする児童など様々な違いの中で生活。互いを認め合いながら学校生活を送ることで、多様な価値観に触れることができる。つまり、自分の認識の枠内での学びに留まるのではなく、認識の外にある者との関わり合いを通して自分の認識を相対化しながら、絶えず認識の更新を図ることができる。:

多様性を学校経営の柱に据え、国語科研究に生かしていることに先進性を感じました。第八代国連難民高等弁務官　故緒方貞子氏の言葉『超我の奉仕』(Service above Self) に直結するものでもあります。

Ⅲ　子どもの「問い」を大切にする学習の構築を

子どもが「問い」をもつタイミングは、教材と出会う場面です。素朴な「問い」から質の高い「問い」へと進化させることが大切です。

（事例１）　山形新聞社説（２０２４年５月６日付）～岸田総理がブラジルでルラ大統領と会談し、アマゾンの森林保護など世界的な気候変動対策で協力する方針を確認し、経済連携や脱炭素社会実現に向けた共同声明も発表した。（中略）外交に近道はない。環境や防災、食料、先端技術、エネルギーなど相手国と利害が一致し互恵関係を築きやすい分野から成果を積み上げる努力が求められよう～。その後の記者会見で多様性と包摂の言葉が使われていました。→　**みんなで考えたい問い**

国連の持続可能な開発目標（SDＧｓ）に関連し、自治体の発行する「ＳＤＧｓ債」が生物多様性の保全に一役買っています。この債券で調達する資金の一部はトキやコウノトリの生息環境整備、藻場や漁港施設整備、河川や湖沼の生態系を調査研究する施設整備など幅広く活用されています。従来は二酸化炭素（ＣＯ２）排出量削減に向けた取り組みが主だったが、環境意識の高まりで生物多様性にも目が向き始めました。→ **発展課題で共有すべき問い**

（事例２）　山形県鶴岡市立「加茂水族館」（クラゲ水族館で有名）館長奥泉和也氏の講演

弱小水族館を現在の有名水族館に育て上げた感動的な話はもちろんのこと、世界中の海の環境汚染について「今すぐにでも積極的に取り組まなければ大変なことになる」と警告を発せられました。これは、私たちの生活ゴミ問題に直結するということでした。海の生物たちは、「マイクロプラスチックゴミ」を、毎日体内に蓄積しているのです。その魚たちを人間が食するということでした。この「負の連鎖」が問題なのだと強調されました。内陸に住む人間は、自分たちの使用済みプラスチックゴミが、なぜ、海洋汚染につながるのかすぐには理解できなかったのです。

→　**一斉授業やグループワーク等で協働的な学びを通し個の問いに返る授業構成を**

Ⅳ　教科を超えて活用できる資料の提供を

山形県を代表する最上川は、米沢市の吾妻連峰を起点とし、日本海の酒田港に注ぐ全長２２９㎞の県内だけを流れる川です。日本海に流れ下ったゴミが世界中の海の汚染につながっているのです。最上川浄化に取り組むＮＰＯ法人『最上川２２９ネットワーク』は、それぞれの流域で集められたゴミを分類し、環境浄化に取り組んできました。そこで取り上げられた海洋汚染要因の１つがマイクロプラスチックゴミだったのです。このことを我がこととして捉え、学校教育で考えさせることが喫緊の課題だと考えます。

耳慣れない用語について学習を→**カタカナ言葉やアルファベット文字の意味を知る**

D・E・I　（Diversity　Equiety Incrusive）

多様性を尊重し、公正公平な考えに立ち、お互いを包摂しあうこと。

多様性　（Diversity）を重んじるとは全ての背景、年齢、民族、人種、肌の色、障害、学習スタイル、宗教、信条、社会経済的立場、文化、婚姻状況、使用言語、性別、性的指向、ジェンダー自認、だけでなく、異なるアイデア、考え、価値観、信念をもつ人々による貢

献を大切にするという考え方。地域社会でのパートナーシップ（Partnership）〈共同、協力、提携、仲間関係〉を深め、あらゆる側面で公平さ（equity）を促進していく。

SDGs（Sustainable　Devlopment Goals）

持続可能な開発目標のこと。１７項目あり（２０１５年国連で採択された開発目標）誰一人取り残さないという強い信念のもとに設定。

１　貧困を無くす　２　飢餓を０に　３　すべての人に健康と福祉を　４　質の高い教育をみんなに　５　ジェンダー平等を実現しよう　６　安全な水とトイレをなど。この１７項目を分かり易く５Ｐにまとめた資料紹介

５Ｐに学ぶ 宮城県東松島市（SDGｓ　未来宣言都市　　２０１８年）

１　Ｐｅｏｐｌｅ　人間としての尊厳（Ｒｅｓｐｅｃｔ）を　貧困解消、健康保持産業振興と活力ある住みたくなる町を目指す

２　Ｐｒｏｓｐｅｒｉｔｙ　豊かさの追求（耕す意）を　子育てしやすい環境を健康で安心して子育てできるまちを目指す

３　Ｐｌａｎｅｔ　地球環境を守り、自然豊かな美しい町を　災害に強く安心・安全・快適なまちを目指す

４　Ｐｅａｃｅ　争いのない平和な社会を地域民に信頼され未来へ託せるまち作りを目指す

５　Ｐａｒｔｎｅｒｓｈｉｐ　誰とでも仲良く信頼できる町を人材育成（若人など）と未来への夢を語れる町を目指す

ＮＰＯ法人
「最上川ネットワーク２２９」講演

Ⅵ　授業への取り組みについて

教科書各社は、世界中の環境汚染・破壊に関する論文等を掲載し、児童・生徒の興味・関心を高めるねらいが共有されています。前段で示した海洋汚染について、山形県内だけを流れる「最上川」とその支流を含む流域の周辺で考えてみます。県内各小・中・高などで独自の活動が展開中です。共通するのは、各校の児童生徒会活動で行われるペットボトルや蓋回収などがその１例です。これらの活動は、国際紛争や貧困・飢餓で苦しむ世界中の子どもたちのための予算などに活用されます。一方、社会福祉活動にも役立てられています。障がい者用車イスやメンテナンスなど施設の不十分な設備などにも利活用されているのです。

さて、「最上川環境ボランティア」は県内共通の環境保全活動として現在も活動中です。地域ごとにその活動は特色をもっています。山形県白鷹町では、日本一の簗場（鮎）といわれる場所があり、観光客誘致の一大スポットにもなっています。そこでの取り組み（白鷹町立東根小学校）を紹介し、その現状を知ってほしいと思います。

１　山形県ＮＰＯ法人『最上川ネットワーク２２９』が主宰する最上川流域のゴミ問題を理解する。

日本海に流れ込む環境汚染ゴミの量とその内容。農業用ビニール、ペットボトル、食材用プラスチック容器、コンビニ等で配布する（箸スプーンなど）のプラスチック類。

２　最上川をゴムボートに乗って検証する。

各地に分散して実施。上流域・中流域・下流域で、どんなゴミが出ているのか、どのような違いがあるのかを検証する。

３　ゴミの分類と量の違いをグラフなどにまとめる。

地域によって水のきれいさやゴミの中身が違うことに気付ける。上流域～水はきれいだが、プラスチックゴミは意外と多い。中流域～水は少し濁り気味。農業用ビニール、ペットボトルなど多い。川岸のあちこちに農業用ビニール等が引っかかっている。下流域～川幅は広くなり、水は混濁している。生活用品の種類が多くなる。上・中流域に比べると何倍ものゴミ量が確認された。海岸に打ち上げられたゴミの種類は、魚網、ビン、空き缶、などプラスチックゴミ以外のものが多くなっていることが分かる。

最上川上流域のペットボトル

最上川中流域のビニールゴミ

４　ゴミ減量化にどう取り組むかをみんなで考える。

自分たちが使用した生活不用品は海洋汚染につながっていることに驚く。一人一人が気をつけなければ解決しないことを学ぶ。

５　世界の環境汚染防止のために啓蒙すべき内容とは何か。

自ら発信する手立てを考える。協力できる仲間を増やす。日本国内だけでなく、世界に目を向ける。世界各国の仲間とラインなどで情報交換し、世界中の環境汚染問題を共有し、解決策を見出していく。

６　今後に生かすべきことは何か。

まとめるとき、「ヒント」になることを確認する。▼特に印象に残ったことやその理由▼自分の知識や経験と比べて気付いたこと　▼自分の考えとの共通点や異なる点、このようなことをノートに書き出しておく。

自分の考えが、グループや友達の話を聞いて広がったり深まったりしたかを記録する等、地域発信のために記録したものをもとに、グループごとに発表できる内容の検討をする。図や表グラフ等、聞き手によく伝わる内容になっているか、お互いが発表者や聞き手になって、出来具合を検証する。

今後の学習に向けて、どのような学習展開をすれば、国語科の学力や能力の定着化を図れるか吟味が必要です。そのためには、子ども一人一人の能力に合わせた「個別最適な学び」と「協働的な学び」の課題に対する深く鋭い国語科教材研究が大切であると思われます。そのことが問われているのです。